

二〇一九年度 第二回入学試験問題

国語 (五十分)

この冊子さつしには、

文章一

文章二

の二つの文章があります。

文章一

いま、在来種^①と外来種、合わせて二五〇種類もの魚が多摩川にすんでいます。外来種の増加はアタマの痛い問題ですが、いっぽうで多摩川はそうした魚たちもいっしょに養えるほど豊かな川だ、という言い方もできるでしょう。

しかし、^②もともと多摩川は魚にとつてはすみづらい川でした。

本来、多摩川の在来種といえる魚はいったい何種類だと思いますか？

外来種としてやってきて根づいてしまっている魚もいますが、ひとまず明治時代より前からいる魚を在来種とすると、その種類はほんとうにわずかです。

おもな魚をあげれば、上流にはイワナ、ヤマメ、カジカ。中流にサクラマス、ウグイ、コイ、ギンブナ、ウナギ、ナマズ、アブラハヤ、ニゴイ、シマドジョウ、スナヤツメ、ジュズカケハゼ。

下流にハゼ、スズキ、ボラ、ヨシノボリ、ウキボリ、スミウキボリ、シラウオ。

ぜんぶでおよそ二〇種類ほど。これがもともと多摩川にい

た魚です。

どうしてこんなにすくなかったのかといえば、じつは多摩川の流れの速さがその大きな理由です。

多摩川は標高一九五メートルの笠取山から流れはじめますが、^③そこから羽田の河口までは一三六キロメートルと距離があまりありません。山から海まで一気に水がかけおりの川なのです。

富山県の黒部川を知っているでしょうか？

急峻な北アルプスから流れ落ちるこの川は、日本を代表する急流として有名ですが、じつは多摩川はその次、日本のおもな川の中では三番目に傾斜^④がきつい川なのです。

A、ダムや堰^{せき}がなければ、おそらく多摩川下流にかかる東京・大田区のガス橋のあたりまでは瀬^せのはずです。そこから海までは一〇キロメートルほどしかありません。

ふつうの川であれば山から海までもっと距離があり、源流から河口までは変化にとんだ多様な環境^{かんきょう}があります。けれど、多摩川の場合は、急流がそのまま海に流れこむため、環境の変化にとぼしく、すめる魚種が限られていたのです。

B、流れが速ければ水があたためられるひまありません。

多摩川の源流部の奥多摩にはわたしもよく遊びに行きますが、真夏でもその水温は一八度を超えませんが、手を入れると

ヒヤツとして、かなり冷たく感じます。むかしはその冷たい水が海までそそぎ、魚がすむにはこれも悪条件でした。

流れの速さ、水温の低さ。そのために多摩川はほかの川と比べても指折りに魚種の少ない”**X**”川だったのです。

C、それがなぜ、これほどまでに豊かになれたのか。魚の種類も多いのですが、その数がまたすごいのです。むかしはコイなんてめつたに釣れませんでした。いまは初心者でも六〇センチを超える大物がいくらでも釣れます。

わたしが多摩川の魚類調査をはじめたころ、魚がたくさんとれることにまずおどろきました。網を一回入れただけで、コイ、フナ、ウグイ、アブラハヤなどがどつさりとれる。しかもみんな丸々と太っています。

わたしの子ども時代だって、いまの一〇分の一もいなかったでしょう。もつとむかしを知っている漁協の先輩たちに聞いても、「こんなに魚はいなかった」とだれもが口にします。その魚影の濃さは、わたしがこれまで全国各地を歩いて調査してきた川の中でもダントツです。

⑥ いったい、どうしてこんなに魚がいるのか？

その理由は、水の中に揺れるクレソンが教えてくれます。

多摩川では、下水処理場と川をつなぐ水路に野生のクレソンが生えているのですが、どれも葉が青々として、軸も太くて立派です。ひとつつつまんで口に入れれば、ほろ苦くつと

てもおいしい。

じつは魚が増えた理由は、こうやってクレソンが大きく育った理由と同じ。下水処理場から出る下水処理水なのです。

下水処理水は、きれいなだけでなく、じつは生き物たちにとって栄養豊かな水です。そこには「チツソ」と「リン」という有機物がわずかに含まれ、それがまず水中の微生物であるプランクトンのエサとなります。

すると、繁殖したプランクトンをエサに、こんどは水生昆虫や小魚が増え、さらにそれらをエサにする魚たちも増える。そうやって生き物が増えれば、水中に排せつ物（フン）も増え、それもまた有機物なので川を豊かにしていきます。

おそらくこうしたサイクルを、多摩川は水質がよくなってきた一九八〇年代から人知れずおこなってきたのでしょう。

そのころの多摩川は完全に見捨てられた川でした。そこにどんな生き物があるか、水の中にどんな営みがあるか、関心を持つ人はだれもいませんでした。でも、じつは水面下では着々といのちが育まれていたのです。

⑦ 下水処理水は、川をきれいにしただけでなく、生き物たちにとつては”いのちの水”でもあったのです。

(山崎充哲『タマゾン川』旬報社より)

文章二

「さようなら」のあいさつを終え、教室を出て廊下を歩いていたら、とつぜん後ろから「待って、羽沢さん」と、声をかけられた。

ふり向くと石野さんが追いかけてきて、少しぼちやりした顔をくしやりとくずすと、わたしに向かつて **A** を合

わせた。
「羽沢さん、お願い。今日のうさぎのエサやり、代わってくれん？」

「え？」

「わたし、今月のエサやり当番なんですけど、^①どうしても急いで行かんといけんところがあつて」

「でもわたし、どうやったらいいかわからんし」

そう言うわたしに石野さんは、茶色いズボンのポケットから古びたカギを取り出して差し出した。

「これ、うさぎ小屋のカギ。これで戸を開けて中に入ったら、密閉容器が置いてあるから、そのなかのドライフードをエサ

のお皿に入れてほしいの。それから、金網かなあみに取りつけてあるウォーターボトルの水をいっぱいにして。あと、できれば……でいいんだけど、ホウキとちり取りが置いてあるから、それでちらかった干し草とかフンとかをかんとんに掃除そうじしてくれたら、すごくうれしい」

^② 石野さんは、どうして親しくもないわたしに頼たのむのだろう。そう思ったけれど、目の前で **A** を合わせている姿を見たら断ることなんてできなくて、しかたなく、差し出されたカギを受け取った。

石野さんは、パツとうれしそうな顔になり、「ありがと、ほんとにありがと、ありがとありがとっ！」

と早口で言うと、背中のランドセルを揺ゆらして、廊下をドタドタと走っていった。

その勢いにぎよっとした感じで、少し先を歩いていたほかの子たちが、廊下の端はしつこによけた。それがなんだかおかしくて、わたしはちよつとだけ笑った。

うさぎ小屋のカギを持って外に出ると、いつものようにみんなの流れとは反対に、校舎の裏に歩いていった。裏庭は表のグラウンドとちがいで、校舎の陰かげになっているせいか、少しひんやりとしている。

うさぎ小屋の前で、金網ごしに中をのぞいた。エサをあげに来たというのに、うさぎたちはわたしになんてちつとも注意を払わずに、思い思いのほうを向いている。

そばにある木の根元にランドセルを置き、小屋の後ろに回ってカギを開け、うすい木のとびらから中に入った。

入ってすぐに、人がひとりようやく通れるくらいのコンクリートの通路があつて、そこに大きなプラスチックの密閉容器が置かれていた。ホウキやちり取りがフックにかけられ、その下には蓋付きのごみ箱もある。

コンクリートの通路と、うさぎが放されているところは金網で区切られていて、そこにもうひとつとびらがあつた。

わたしは、そこからうさぎたちのいる場所に入った。金網のむこうとこちらから見る景色では、まるで感じがちがつていた。

三つ置かれているエサ皿を持って通路にもどり、計量カップを使ってドライフードを入れた。金網に取りつけてあるウォーターボトルも取り外し、外の水道で水をいっぱいにした。

そのあと、地面の上に転がっているフンと干し草をホウキとちり取りで集めて、ごみ箱に入れてふたを閉めた。

ようやくほつとして、それからまた、うさぎがいる場所に入ってしまった。

うさぎたちは、わたしがそこにいても、びっくりしたり逃げたりしない。きつと毎日、飼育委員の子たちが、きちんとお世話をしているからだろう。みんなから忘れられたような、ひっそりとしたうさぎ小屋なのに。

わたしはしやがんで、薄茶色のうさぎの背中にそっと手を置いてみた。ふわふわの毛に包まれた体は、思ったよりもどっしりしていて、じんわりと温かかった。そのままゆっくりなると、気持ちよさそうに丸い目を細くした。

かわいくて、胸の奥がきゆうつとなつた。

立ち上がると、白いうさぎが足元をくるくる回つた。もう一度しやがむと、指先をぺろぺろとなめた。

石野さんも、毎日こうしてうさぎと遊んでいるのだろうか。

いつだったかかすみちゃんが、教室のすみっこで本を読んでいた石野さんを指さして「ねえねえ、石野さんのあの服って、ありえないよね」と、菓子ちゃんたちに言っていた。

たしかにそのときの石野さんは、赤と紺色のチェックのズボンに、パンダのイラストがついた黄色いトレーナーという、首をかしげたくなくなるようなセンスの服を着ていた。

かすみちゃんたちは顔を寄せ合つて、「あれはひどーい」と言いながらくすくす笑っていたけれど、同じ穂足幼稚園に通っていた石野さんをばかにされたようで、わたしはすごくいやな気持ちになった。

しばらくして、うさぎ小屋を出た。しつかりとカギをかけ、水道で手を洗ってからハンカチで汗を拭き、ランドセルを背負った。

セミの声が、勢いの強いシャワーみたいに、頭の上から降ってきた。水道のむこうに、十本ほどのひまわりが、大きな花を咲かせているのが見えた。毎日ここを歩いていたのに、なぜか今まで気づかなかつた。

裏門を出て、細い道をゆっくり歩いた。家に帰ったら、まず冷たいジュースを飲んで、宿題と通信添削の教材をして、それから……なにをしよう。

以前は、放課後はよく菜子ちゃんと遊んでいた。ふたりで羊毛フェルト細工をしたり、クレープを焼いたりマンガを読んだりしていたけれど、菜子ちゃんは最近、かすみちゃんやほかの子たちと遊んでいるようだ。

アウトレットモールの近くに大型スーパーができてから、そのなかにあるお惣菜屋さんで働くようになったお母さん

は、毎日夕方まで帰つてこない。となり町にある銀行に勤めているお父さんも、帰ってくるのは夜遅くなってからだ。

家に帰っても、暗くなるまでひとりぼっちだ。そう思うと、このまままっすぐ帰るのがいやになった。

ちようど、目の前の道は分かれている。小さな自転車屋さんのある角を、右に曲がれば家への道だけれど、わたしは左に向かった。

たしかこの先に、千代商店という古いお店があつたはずだ。穂足幼稚園に通っていたころは、お母さんの自転車の後ろに乗って買い物に行った。一年生のときは、菜子ちゃんとふたりでお菓子を買いに行った。

だから、以前はときどき通つた道なのだけれど、今わたしの目に入ってくるのは、記憶のなかとはずいぶんちがう景色だった。

正門から続く道ほどではないけれど、アウトレットモールができたあと、ここも変わってしまったのだろう。

クルクル回るサインポールがあつた散髪屋さんは、ガラス張りの美容院になっていたし、雑草だらけの空き地だった場所はコンビニになり、そのまわりには家が増えていた。ただ、道幅だけはそのままだ。

④ 暑いし、喉も渴いてきた。そろそろ引き返そうと思ったとき、まだ新しい二階建てアパートの前の大木と、その下の祠に入ったお地蔵さんが目についた。

このお地蔵さん、見覚えがある。

そう思つて近づこうとしたら、目の前の景色がぐらりと揺れた。体からふつと力がぬけて、なにが起こつたのかわからないまま、わたしはそこにしゃがみこんでしまった。

「うわつ、ちよつ、ちよつと、どうしたの？」

女の人の声がして、足音が近づいてきた。

アパートのとなりは、小さなかわいいパン屋さんだった。ガラスのドアに、緑色のおしゃれな文字で『小麦堂ミツホ』と書かれている。

店のなかは心地よく冷房が効いていて、おいしそうなパンの香りでいっぱいだ。パンが並んだ棚の奥に、木の丸テーブルが置かれ、五脚の椅子がそれを囲んでいた。

わたしはそこに座つて、しばらく休ませてもらうことになつた。

連れてきてくれたのは、白いコックドレスを着た、三十歳くらいの背の高い女の人だった。

あまりに日差しが強かったから、お店の前の鉢植えを日陰に入れようと外に出て、様子がおかしいわたしに気づいたそうだ。

「気分はどう？ 病院、行かなくていい？」

女の人は、心配そうにわたしを見た。

「はい、さつきはちよつとクラツとしたけど、もう大丈夫です」

「そう、暑いから気をつけんとね。えーと、お名前は？」

「羽沢美織です」

「わあ、かわいい名前。わたしは澄田です、澄田光穂っていうの。この時間はお客さんも少ないし、ゆっくり休んでつてええからね」

「え、ミツホつて、お店の名前といっしょ……。ここ、光穂さんのお店なんですか」

「そうよ。これでも、店長さんなのよ」

光穂さんは、ぐんつ、と **B** を張つてそう言うのと、店の奥に引っこんだ。それから少しあいだをおいて、グラスとパンをのせたトレイを持ってもどつてきた。

「冷たいレモネードと、焼きたてのアップルパン。よかったらどうぞ」

わたしの目の前に、おいしそうなパンとレモネードが置かれた。

「え、でも……」

「遠慮^{えんりょ}せんでね。小さなパンだから、夕ごはんにはひびかんはずよ。これ、実は新商品なの。食べてみて、感想を聞かせてくれたらうれしいな」

さつきはとても食べられる気分じゃなかったけれど、落ちていた今は、おなががすいていた。わたしは、ちよつと迷つてから、

「いただきます」

と言った。

あまずつばいレモネードも、シナモンの香りがする。パンも、とてもおいしかった。

「このパン屋さん、お店のなかでも食べられるようになってるんですね」

と言うと、わたしのとなりに座った光穂さんは、

「そうそう、そうなんよー」

と、うれしそうに笑ってうなずいた。

「あのね、美織ちゃんがしゃがみこんでたところに、かわいいお地藏さんがあったでしょ？」

「はい」

「その横には、三年前まで千代商店っていう古いお店があったんよ。ちよつとした食料や文房具や、生活雑貨を売つとるお店で」

「あ、おぼえてます。わたし、よくお菓子を買いに行つとつたから」

わたしは頭のなかに、千代商店を思い浮かべた。たしかに古いお店だったけれど、いつ行つてもきれいに掃除されていて、店の前のお地藏さんは、まるでお風呂^{ふろ}あがりのようにさっぱりしていた。

アイスクリームやお菓子、トイレトパーや文房具などが売られている店内には、千代ばあちゃんという、とてもやさしいおばあちゃんがいた。

「じゃあ美織ちゃん、千代商店の真ん中に、丸い木のテーブルと椅子が置かれとつたのも、おぼえてる？」

「はい」

そこには、よく近所の人たちが座って、楽しそうにおしゃべりしていた。店の前がバス停だったから、バスを待つ人もいた。

そういうえば、穂足幼稚園でいっしょだったキキちゃんとい

う女の子は、いつもそこで絵を描きながら、お母さんが仕事から帰ってくるのを待っていた。フリルやラメのいっぴいついた服を着せられて、ずいぶん派手だったけれど、かわいい子だった。

「わたし、千代商店で買い物したあと、テーブルでおしゃべりするのが大好きだったんよ。千代さんったら、新発売のお菓子が出ると必ず食べてみるの。そこにいるみんなにも、ひとつずつ配ってね。そのこと、美織ちゃん、知ってた？」

パンを口に入れていたわたしは、黙って首を振った。光穂さんは、ちよつと笑って話し続けた。

「千代さん、新しいお菓子を食べるたびに、すごく幸せそうな顔をしてね。自分の小さなころには、こんなお菓子なんてなかったよ、今は、きれいでおいしいもんがいっぱいあって楽しいなああって、よく言っとられた。ほら、昔はよかつたとか、今はどうしてこんな世の中になったのか、なんて言う人は多いでしょう？ だけど千代さんはその反対だったのよ。ねえ、千代さんって、いいお婆あちゃんだったよねえ」

パンを飲みこんだわたしは、

「はい、すごく」
とうなずいた。

「それでね、去年このパン屋を開くとき、千代商店みたいにしたいと思ったの。お客さんがテーブルに集まって、お茶を飲んだりおしゃべりしたり、新商品の試食をしたり。そんなふうに、できたらええなと思ったんよ」

そういえばその丸テーブルは、千代商店にあったものとよく似ていた。わたしは、なんだか千代婆あちゃんが恋しくなっていた。今は、どうしているのだろう。

ゆつくりとパンを食べ終え、レモネードを飲みほしたわたしに、光穂さんは、

「お家の人に、迎えに来てもらったらどう？ 電話してあげるから」

と言ってくれたけれど、わたしは首を横に振った。

「ひとり帰ります。それに、お母さんはまだ仕事だから」

「あら、そうなん？」

「暗くなるまで、帰ってこんから」

「それは……、ちよつとさびしいねえ」

わたしは少しうつむいて、深く息を吸いこんでから口を開いた。

「アウトレットモールが、できんかったらよかつたんです。スーパーもコンビニもマンションもできなくて、この町、前

のままだったらよかったです。そしたらわたし、ずっと楽しかったはずなんです」

光穂さんは、首をかしげた。

「それは、今が楽しくないってこと？」

わたしは、小さくうなずいた。

「うちのお母さん、新しくできたスーパーのなかにあるお惣菜のお店で働きはじめてから、いつも夕方遅くまで帰ってこなくて。帰ってからも、疲れた疲れたって言いながら、お惣菜のパックを並べるんです。前は、いろんなお料理を作ってくれたのに。町が変わらんかったら、転校生がたくさん来ることなかったし。穂足幼稚園でいっしょだった友だちが出ていくこともなかったし、きつとずっと楽しかったと思う……」

じつと聞いていた光穂さんは、「うふっ」と笑った。

「それと同じようなこと、わたしも言ったことがあるんですよ、千代さんに」

「えっ？」

わたしは、顔を上げて光穂さんを見た。

「アウトレットモールができることになって、そこに住んだら友だちが引越していったとき。知らない人がどんどん

ん入ってくるのも、見慣れた風景が変わってしまうのも怖くって。いつまでも、町が変わらんかったらええのにねって、千代さんに言ったの」

「そしたら、千代ばあちゃんは何？」

光穂さんは「ん、ん」と喉の調子を整えるようにしてから、口調を変えて言った。

「ものも町も人も、なんだって変わっていくよ、時間は流れとるんだから。いろんなことを、少しずつ少しずつ、いいほうに変えていけたらええなあーって」

わたしが見つめると、光穂さんはちよつとはずかしそうに C をすぼめた。

「ねえ美織ちゃん、みんなだれでも、なにかを手放したり、ちがうなにかを手に入れたりしながら、生きてるんじゃないのかなあ」

千代ばあちゃんや、光穂さんの言ったことの意味は、わたしには半分くらいしかわからなかった。それでも、気持ちが明るくなってきた。

わたしは静かに立ち上がって、ランドセルを背負った。

「ふらふらしない？」

「平気です。レモネードもパンも、とってもおいしかったです

す」

「うん、またいらっしやいね。そして、ここでおしやべりしていつてね」

「はい」

わたしは、今度はお母さんと来ようと思った。お母さんの仕事が、お休みの日に。

「ありがとうございます」

と頭を下げて、店を出た。

強かった日差しはやわらいで、夕方の風がそよりと吹いた。

次の日、教室に入ったとたん、石野さんがわたしのほうに駆け寄ってきた。そして、昨日と同じようにわたしに向かつて A を合わせると、

「昨日はありがと、急いどつたからとつぜんお願いして、ほんとにごめんね」

と言った。

わたしは、胸の前であわてて手を振った。それから、ポケットからうさぎ小屋のカギを取り出して、

「そんな、いいよいいよ。かんたんなことだったし。うさぎ、かわいかったし」

と言いながら、石野さんに返した。

「ありがとうございます、羽沢さん、やさしいね」

「いや、いやいやそんな……」

照れたわたしがランドセルを置いて席に座ると、石野さんも前の席に腰を下ろした。

「でも、なんでわたしに頼んだん？ わたし、その……、石野さんとはあまり話したことなかったのに」

「え、だつて羽沢さん、よくうさぎ小屋をのぞいとつたから。

あのね、わたしいつも、小屋のなかに入っておいでよつて言おうと思うんだけど、言う前に羽沢さんは帰っちゃつて」

わたしは、ようやく納得した。

「わたしね、昨日は幼稚園に弟を迎えに行かなくちゃいけないくて、それで急いどつたの。いつもはおばあちゃんが行くんだけど、おばあちゃん、昨日の朝からぎっくり腰で動けんようになったしまつて」

「石野さん、弟がおるん？」

「うん、穂足幼稚園の年長さん」

「へえー、いいなあ。わたしも弟とか妹とかほしいなあ」

「ううん、そんなにいいもんじゃないよ。今朝だつてすごく機嫌が悪くて、幼稚園に連れていくの、たいへんだつたんだ

もん」

「幼稚園に、行きたがらんかったん？」

「そう。うち、お母さんおらんし、お父さんはいそがしいから、いつもおばあちゃんが服とか靴くつとか買ってくれるんだけどね。それが、なんかちよつとズレとるっていうか、センス悪いっていうか……。昨日、弟は、小さな黒い水玉がついた赤いTシャツに、派手な緑色のハーフパンツをはいてったの。そしたら、スイカみたいだつて友だちに笑われたらしくて。それで、幼稚園に行きたくなかったみたい」

あ、と思った。

石野さんがいつも着ている服も、きつとおばあちゃんが買っているのだ。かすみちゃんたちが指をさして笑っていたときのも、きつと。

わたしは思わず、

「友だち、ひどいね」

と言ってしまった。

けれど石野さんは、首を振った。

「弟のほうも、気にしすぎなんよ。せつかくおばあちゃんが、一生けんめいさがして買ってきてくれるんだから、いばつて着とつたらええのに。でもまあ、次に弟のものを買うときは、

おばあちゃんについていって、わたしもちゃんと選ぼうとは思つとる」

そう言つて笑う石野さんのTシャツは、二本足で立つネコのイラストの下に、なぜかSWEETSの文字が書かれていた。(どうしてネコの下にスイーツ?)^⑨と思つたけれど、それを堂々と着ている石野さんが、とてもカッコよく見えた。

「ねえ、羽沢さん」

「ん？」

「今日の放課後、ひまならうちに来ない？ おやつにホットケーキを作ろうと思うんだけど、いっしょに作ろうよ」

石野さんは「どう？」というふう^⑩に首をかしげた。

「うん、行く！」

「じゃあ、えーと、三時半に裏門で待ち合わせしよう。自転車でおいでよ」

チャイムが鳴つて自分の席にもどつていく前、石野さんはこつと笑つた。

丸いほつぺに、すごくかわいいエクボができた。

(中山なかやま聖子せいこ『さよなら、ぼくらの千代商店』岩崎書店より)

国語(一)

受験番号

氏名

一枚目

二枚目

合計

一、次の線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

- | | | | |
|---|-------------|---|--------------|
| 1 | 事実をハクジヨウする。 | 2 | 問題がサンセキする。 |
| 3 | ニクガンでは見えない。 | 4 | 完成を祝うジヨマク式。 |
| 5 | 仲間からラクゴする。 | 6 | リコの態度。 |
| 7 | おセジを言う。 | 8 | 健康診断でサイケツする。 |

二、別冊の「文章一」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一 線①「外来種」とありますが、この文章の内容をふまえて次の問いに答えなさい。

(1) 「外来種」は「多摩川」におよそ何種類いると言えますか。解答らんにあうように漢数字で答えなさい。

約 種類

(2) 「外来種」について説明した次の一文の空らんに入る言葉を答えなさい。

多摩川にすみついたのが である魚のこと。

問二 線②「もともと多摩川は魚にとつてはすみづらい川」について

(1) 「魚」が「すみづらい」とされる「多摩川」の特色を文章中から五字で二つ探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

(2) この「多摩川」の環境かんきやうに変化があつた時期はいつごろですか。文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問三 線③「そこ」とありますが、「そこ」を示す表現を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問四 線④「傾斜けいさがきつい川」とありますが、なぜ「傾斜がきつい」のですか。その理由を「距離」という言葉を用いて簡潔に説明しなさい。

問五 空らん A、B、C に入る最もふさわしい言葉を次のア、イ、ウの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ただし、同じ記号をくり返すことはできません。

ア、ところで イ、しかし ウ、さらに エ、あるいは オ、もし

問六 空らん X には「魚種」が多い現在の「多摩川」の様子とは対照的な意味の言葉が入ります。自分の言葉で答えなさい。

問七 線⑤「その数がまたすごい」とありますが、魚の数の多さを表現した言葉をこれより後の文章中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問八 線⑥「水の中に揺れるクレソンが教えてくれます」とありますが、クレソンのどのような様子が、どんなことを教えてくれるのですか。簡潔に説明しなさい。

問九 線⑦「下水処理水は、川をきれいにしただけでなく、生き物たちにとつては『いのちの水』でもあつた」について

(1) 「『いのちの水』」を次のように言いかえたとき、解答らんにあう言葉を文章中から四字で探し、抜き出して答えなさい。

いのちの を生み出す水。

(2) 「下水処理水」が「生き物たち」の「『いのちの水』」と言えるのはなぜですか。その理由を解答らんにあうようにまとめて答えなさい。

下水処理水には

ことなるから。

